

## ジャガイモで作った象牙

薬学雑誌 第13号 明治16年(1883年)677頁

袴姿の男がジャガイモを大量に茹で、粘土のようにこねて  
いる場面を想像した。長屋の畳の上で、長くて太い棒を作  
り、それを湾曲させ途中で折れないようにそーっと乾かした  
あと、先を尖らせて磨く。内職として骨董品屋に売るのだろ  
うか。しかし当時いくら本物の象を知らない人ばかりでもす  
ぐ偽物とばれるだろう。

記事は、タイトル『馬鈴薯製象牙』のあと著者名もなく、  
いきなり本文に入る。薬誌は明治14年11月に創刊されたばかりで、雑誌、論文の形式がまだ定まっていない。「その製造たるや、先づ馬鈴薯の皮を剥き、その疣目(芽)を去り、注意して海綿状の部分および着色したる部分を削除す」と料理の本のよう。要するに希硫酸で煮るのだが、濃度や時間は発明者の秘密であって(論文なのに)、「各人自ら試験することあらば或いは秘訣を会得することあらん」。「最も注意すべきは馬鈴薯の種類および生育の度」という。

煮ていてだんだん固くなってきたら温水、冷水の順で洗  
い、ゆっくりと乾燥させる。「体面は多いに平滑で、展転し  
やすく、日光にさらすも破裂することなし。帯青白色、堅硬  
にして耐久の性あり、その性弾力を有するが故に能く玉突き  
の球に充つべし」。著者はこれを擬象牙と呼んでいる。つま  
り象牙は形ではなく、材質のことだったのである。

プラスチックのない時代は、珊瑚、鼈甲とともに象牙の需  
要は非常に高く、ビリヤードの球だけでなく、三味線、箏の  
バチや爪、ピアノ鍵盤、もちろん細工が容易であるから工芸  
品などに引っぱりだこだった。しかし圧倒的に使われたのは  
印鑑である(朱肉がなじみやすい)。最初の可塑性樹脂セルロ  
イド(1856年)をはじめプラスチックも人工象牙を目指して  
いたほどだ。それでも手触りなどなかなか本物に近い素材は  
作れなかった。

だからワシントン条約で1989年から象牙の輸入が止まっ  
たとき、業者は困った。今、人工象牙は牛乳カゼイン蛋白など  
に酸化チタンを混ぜて作られている。しかし誰か、この薬誌  
の「論文」を読んでジャガイモを茹でた人はいないだろうか。

小林 力